中世社会と差別された人々

1　目　標

（1）　中世社会において民衆の間にケガレ観が広がり、生活に影響を与えたことを理解する。
（2）　ケガレ観が広まる中、それにとらわれなかった一遍と周りの人々との関わりを知り、反差別の生き方と自分の生き方を重ねる。
（3）　差別されていた人々が生み出した文化が、我が国における伝統文化の基礎を形作っていることを理解する。

2　学習計画（3時間）

（1）　中世のケガレ観について考える（1時間）
（2）　反差別の生き方を一遍から学ぶ（1時間）
（3）　新しい文化を創った人々（1時間）

3　展　開

（1）中世のケガレ観について考える

主な学習活動	留意点
1　中世について知っていることを思い出す。	○資料1　洛中洛外図屏風(巻末資料8・9) 資料を見て、中世社会について思い出す。
2　絵巻物を紹介し、次の6つのテーマについてグループごとに考える。 (1)家の人は何をしているだろう。 (2)杖をついている人の職業は何だろう。 (3)屋外で寝かされているのはなぜだろう。 (4)屋根から家の中をのぞいているのは誰だろう。 (5)門口の焚き火は何を意味しているのだろう。 (6)門口の縄や置物にはどんな意味があるのだろう。	○資料2　春日権現験記縁起絵巻(巻末資料3) テーマを選ばせ、各グループでテーマについて考えさせる。 ・必要であればパソコン室や図書室を活用してもよい。
3　グループの代表が発表する。	○発表の際には発表の仕方を工夫させる。
4　未知の力に人々が持っていた畏れの感情およびケガレ観を確認する。	○出た意見を簡潔に整理する。 ○病気や自然の脅威に対して人々がよりどころとしたものを考えさせる。
5　まとめ。	○自然の力に関係する仕事や、その人々に対して持ったケガレ観・畏れ観が差別観につながったことを指摘する。

参考：洛中洛外図屏風(高津本)

洛中洛外図屏風は、京都の人々の生活や四季の様子を描いた物で、屏風の中には当時差別されていた人々の姿も描かれています。本資料集に掲載している屏風絵の中には、屏風の一番右隅下あたりに、動物の皮を扱っていた人々（皮多）の生き生きとした生活の様子が描かれています。

参考：春日権現験記縁起絵巻(絵巻物の解説)

絵巻物巻８の第２段

家の中にいる男の人は、疫病にかかり今にも死にそうな状態です。この家の中を屋根からうかがっているのは、死に神に例えているのでしょう。病人のいる家の前に火が焚かれ、祈祷用のまじないの品があるのは、祈祷師が死に神を近づけないようにしていることをあらわしています。しかし、祈祷師はこの病人は助からないとの判断を下し、肩を貸してもらい、杖をつきながら家路についています。

やがて病人はなくなり、家の外に出されます。ここには、死をケガレと考えた中世の人々の考え方を知ることができます。

福岡市同和教育研究会　「部落史発見 部落史学習の新しい展開【第３版】」　2003　福岡市同和教育研究会

参考：春日権現験記縁起絵巻

1309年（延慶２）左大臣西園寺公衡が春日神社に奉納。春日明神の神威の高さを示した内容で公家の行事や民衆の生活の様子が精緻に描かれています。細やかな描写においては、大和絵の伝統的な技法を踏襲しています。

澁澤敬三・神奈川大学日本常民文化研究所編　「新版絵巻物による日本常民生活絵引」　第４巻　1984　平凡社

福岡市同和教育研究会　「部落史発見　部落史学習の新しい展開【第３版】」　2003　福岡市同和教育研究会

（２）反差別の生き方を一遍から学ぶ

主な学習活動	留意点
1　教科書の中世の写真を見て、その様子を探る。（人々の暮らしや生活状況を理解する）	○歴史教科書の中世の写真 （一遍上人絵伝の「備前の国福岡の市」が望ましい）
2　事前に一遍について調べた内容を発表する。	○事前に一遍について調べさせ、発表させる。 （時間的に難しいようであれば、一遍に関する資料を用意しておく） ※コラム　一遍
3　中世において、差別されていた人を絵巻物からつかむ。	○一遍の補足説明として、身分に関わりなく念仏札を配ったことを説明する。 **○資料３　一遍臨終の様子(巻末資料10)** 絵巻に描かれた参集した人々の中から差別された人々を探させる。 「犬神人」（覆面の人々）や「ぼろ」（放浪の人々）を指摘する。
4　一遍は人々に何を伝えたのか考える。	○差別されていた人々や、女性たちが一遍の臨終に立ち会ったのはなぜかグループで検討し、まとめる。 **○資料４　念仏札(P53)** ケガレ観にとらわれず、念仏札を配っていった一遍の考え方を理解させる。
5　本時の学習から学んだことをノートに記入する。	○ケガレ観にとらわれず、被差別の立場に立った一遍の生き方から、自分たちは何を学ぶことができるのかを考えさせる。

※コラム：一遍

鎌倉中期　時宗の開祖。　1239年（延応元）伊予国の豪族　河野通広の子として生まれる。母の死をさかいに出家し天台・浄土宗を修める。父の死後一時武士にもどるが再度出家し信濃善光寺・伊予窪寺・紀伊熊野本宮等で修行をつむ。誰でも一度の念仏で人は仏になれるという悟りをひらく。北は北海道・江差から南は鹿児島まで全国を回り念仏札を配り多くの民衆と接し、踊り念仏も加わり爆発的な信者を得た。1289年（正応２）多くの弟子・信者に囲まれ兵庫観音堂で没した。時に51歳。

参考　大橋俊雄校注　「一遍聖絵」聖戒編　　2000　岩波文庫
朝日新聞社編　「朝日百科 日本の歴史 歴史を読みみなおす３ 古代から中世へ」　1996　朝日新聞社

資料４　念仏札

梅谷茂樹　「捨聖・一遍上人」　1995
講談社現代新書をもとに作成

この念仏札には、「南無阿弥陀仏往生決定六十万人」と書かれている。一遍は、身分に関係なく、この念仏札を配ってまわり、往生に漏れる人がないようにとの願いを込めていた。

（3）新しい文化を創った人々

主な学習活動	留意点
1　教科書の「能の舞台」の写真を見て知っていることを出し合う。	○教科書の「能の舞台」の写真 能が深い精神性や形式美をもち、現代でも高い評価を得ていることを伝える。
2　資料５の「後愚昧記」を読み、疑問点などを班で出し合う。	○資料５　「後愚昧記」(P95) 資料を読ませ、疑問点について話し合うように指示をする。
3　資料５の「後愚昧記」を書いた貴族は、どのような考えをもっていたのかを、ノートに記入する。	○「後愚昧記」の記述内容から、筆者の貴族が差別されていた人々に対して、賤視観をもっていたことを確認する。
4　世阿弥の芸に対する姿勢から、差別されていた者がどのような思いで取り組んでいたのかを考える。	○資料６　世阿弥の芸に対する姿勢（P54） 資料から、差別される身ではあったが、芸への姿勢には並々ならぬものがあったことを理解させる。
5　本時の学習を通じて、気づきや感想をノートにまとめる。	○これまでの学習をふまえ、世阿弥の生き方と、貴族の生き方を比較し、どのような生き方が大切なのかを考えさせる。

資料６　世阿弥の芸に対する姿勢

うつろいやすく好みの変化の激しい観客の心を、自分たちの芸に引き留めることなしに芸能者としての生活は成り立たなかった。義満等権力者の一時的な寵愛を受けることは可能であっても、それを失えば飢えが待っていた。

世阿弥は、生きていくために不断の鍛錬と精進を繰り返し、きわめて過酷な生活を送ったことが想像できる。彼は、「花伝書（能の理論書）」の中で、誰の前でも飽きさせないように演じること、いかなる種類の芸も全て修得すること、既存の表現方法に満足することなく、常に新しいものを追求する姿勢を述べている。

世阿弥は、能の芸術性を追求し、飽くなき努力を続けたということができる。「非人」という立場であり、まわりから賤視されていた中、芸の道を追求し続けたからこそ、能は芸術として今日まで受け継がれているのだと考えることができる。

上杉　聰　「部落史がかわる」　1997　三一書房